

ストレングス視点によるジェネラリスト・ソーシャルワーク

－ 地域生活支援に向けた視点と枠組み －

神山 裕美

要 約

ストレングス視点は、論理実証主義から社会構成主義へのメタ理論の転換を背景に、医療モデルのアンチテーゼとして展開した。ストレングス視点は、ジェネラリスト・ソーシャルワークを形成する主要な枠組みであり、その特徴は、利用者のストレングスを見出し、個人から環境への交互作用をふまえて介入することにある。

ICF（国際生活機能分類）とストレングス視点は、利用者の個人因子と環境因子からその長所を見出し開発することに共通点がある。そして、ジェネラリスト・ソーシャルワークによる実践は、ICFの理念を実現するひとつの方法となる。

ストレングス視点によるジェネラリスト・ソーシャルワークは、障害とストレングスをアセスメントする視点を提供し、個人・集団・組織・地域の交互作用をふまえて介入する。ストレングス視点は、地域生活を支援する重要な概念となる。

キーワード：ストレングス視点 ジェネラリスト・ソーシャルワーク ICF（国際生活機能分類） 社会構成主義・地域生活支援

I はじめに

ジェネラリスト・ソーシャルワークは、1980年代以降の英米で、パートレットの「社会福祉実践の共通基盤」¹⁾やジャーメインの「エコロジカル・ソーシャルワーク」²⁾、そしてスペクトとビッケリーの「社会福祉実践の統合化」³⁾や、「バークレー報告」⁴⁾により提起されて育ってきた。日本では、スペシャリスト・ソーシャルワークが研究や実践が中心であり、ジェネラリスト・ソーシャルワークがどのようなものか十分に議論がかみあわないまま推移していた経過はある。

しかし、在宅ケアを推進する1990年福祉八法改正以降の保健福祉統合の流れを受け、2000年の介護保険法や社会福祉法施行から、2006年の障害者自立支援法に至るまで、地域生活を支援する法制度が整備されてきた。

また、2001年WHO総会で採択されたICF（International Classification of Functioning, Disability and Health）により、障害をマイナ

ス面だけで捉えるのではなく、生活機能というプラス面からもみる視点が加えられた。それは従来の心身機能偏重でなく、利用者を全人的に見て、自己決定や主体的参加を尊重する支援のあり方が重視されるようになった。

それらに伴い、相談支援に関わるソーシャルワークも従来の専門分化した方法論でなく、利用者を中心に生活全体を見て、その方法論の統合化による支援を行うジェネラリスト・ソーシャルワークが注目されてきた。

本論では各種文献⁵⁾をふまえた上で、ジェネラリスト・ソーシャルワークを「ソーシャルワークの援助理論を統合して、個人・集団・組織・地域の各対象についてソーシャルワーク援助全体の中で活用する実践」として捉える。そして、ICFや社会福祉法の理念を実現する視点のひとつとしてストレングス視点に焦点をあて、その意味と考え方、及び生物医学モデルとの比較や社会構成主義との関連を検討する。さらに、ICFにおけるスト

(所 属)

山梨県立大学 人間福祉学部 福祉コミュニティ学科

レングス視点の活用もふまえ、ストレングス視点によるジェネラリスト・ソーシャルワークの援助視点と枠組みについて検討したい。

I スtrenグス視点の意味

1 ソーシャルワークにおけるストレングス視点

ストレングスの視点は、1922年リッチモンドや1951年のレイノルズ、1967年モーリーの時代からソーシャルワークの実践原則につながるものとして提示されており、ソーシャルワークの根底を流れる理念といえる。

その後、1970年代の初頭にマルイシオにより、「病理から人間の強さ、資源、可能性への注目」が強調され、ストレングスの視点が提唱された。

1980年代に入り、ヘップワースとラーセン(1986)が、「ソーシャルワーカーは、クライアントの症状や機能障害のみに焦点をあてた評価をしている」と述べており、病理・欠陥に焦点をあてた援助への批判と視点の転換を提起している。

1982年にカンサス大学で精神障害者の地域支援に、個人と地域社会の強さに焦点をあてた援助を行ったところ22ケースのうち19ケースに肯定的な結果が得られた。カンサス大学の研究者チームは、1980年代半ばまでにこの研究に基づいたトレーニングマニュアルを完成させ、1980年代末までに児童養護から高齢者の長期ケアまで、そして地域開発や政策分析までその適用範囲を広げ研究を蓄積した。これらの研究過程を通して、ヴェック、サレイベイ、ゴールドシュタインらによりストレングスの視点や理論的構築がなされてきた⁶⁾。

ストレングスの視点は、リッチモンドの時代からソーシャルワークの根底にあり、サレイベイ⁷⁾によれば理論ではなく思考の方法であり、実践上のひとつのレンズであるという。また、ポーリン⁸⁾も、ストレングスの視点は問題対応型アプローチと異なるひとつのレンズだと述べており、エコロジカルなシステム論とともにジェネラリスト・ソーシャルワークを形成する主要な枠組みであると述べている。

また、サレイベイは、これらのストレングス視点の特徴として、病理・欠損・問題への働きかけ

でなく、人と環境の相互作用をふまえ広い視点で利用者を理解し働きかけることと、利用者と同じ目線で利用者の持つ可能性を信頼し働きかけることをあげている。反面それは、曖昧であり倫理的価値観も含んでおり、ソーシャルワーク援助のひとつの視点を提供しているにすぎないという見方もある。しかし、ヒューマンサービスにかかわる医療・保健・看護等との連携を考えた時、人と環境の相互作用とストレングスに焦点をあてた援助視点は、ソーシャルワークの特徴のひとつを提示しているのではないかと考える。

2 スtrenグス視点による援助

ファストとチャピン(2000)⁹⁾は、ストレングス視点を高齢者援助にあてはめ、その考え方を以下のように示している。

高齢者は、障害や疾病や欠損のため、その力は弱いものだと思われていた。しかし、ストレングス視点では、高齢や障害や慢性疾患は高齢者を示す一部であり、長い人生を生きてきた高齢者の経験や才能や個性を強調している。

従来一般的に行われている個別援助では、利用者が障害や欠陥を持っていることを前提として、実践や理論を構成する傾向があった。これを本論ではファストとチャピンにあわせ医学モデルと捉えるが、そこでは、専門職によるアセスメントや方針決定を重視し、医療基準による身体機能の向上を目的とする場合が少なくなかった。そして、早期発見・早期対応による入院やリハビリテーションを素早く行い、高齢者の生活全般の向上より、病理の診断と治療に焦点を当てる傾向があった。

しかし、ストレングス視点は、利用者や家族や地域社会の持つ強さを発見し、形成することから始まり、利用者自身による問題解決と選択を支援していく。そして、利用者と介護者の望む目的を達成し変化を促していく。一般的に高齢者の障害や病気の進行はそれほど急速ではないので、入院や早期リハビリテーションの必要は、地域のサービスや資源を考慮したうえで、生活全般との関連で判断することもできる。むしろ不必要な入院や治療は、利用者の生活の質を損なうこともある。

また、一般的に高齢者には、心身機能の低下に

よる否定的な固定観念があり、高齢者もそれを受け入れ依存的になる傾向がある。しかし、高齢者の生きる力や人生の知恵や調整能力に注目し、専門職がそれを支援し伸ばしていくことは、不必要なサービスを減らし自立を支援していく上でも重要な視点である。

このように、ストレンクス視点による援助は、利用者の持てる力を引き出し、自己決定による生活を進めていけるよう支援する考え方であり、日本の高齢者の地域支援においても求められる視点である¹⁰⁾。

II スtrenクス視点の系譜と可能性

1 生物学モデルからエコロジカルな視点へ

ストレンクス視点は、リッチモンドの時代からソーシャルワークの根底を流れる理念だが、ソーシャルワーク発展の歴史は生物学モデルの影響を強く受けており、ストレンクス視点が実践の場に意識化されるまで、時間的経過と理論的成熟が必要であった。

医学は、20世紀半ばから実証科学が優位になる中で、生物学を根拠として客観性や中立性を重視し、制度化され標準化されてきた¹¹⁾。そのため、医学は生物学的に疾病の原因を探り、病原体に焦点をあててその消滅や根絶を目的とする。病気の治療は、客観的な科学的ルールと基準に基づいており、社会環境や文化的な力や影響を排除する傾向がある。

しかし、この考え方は、感染症の治療を中心とする時代には適応したが、慢性疾患や生活習慣病は生活の無数の要因が関連するので、細菌（原因物質）を除去すれば治療できるものではない。また、病気は生物学的事実であるとともに、社会的事実でもある。病気やそれが発生する社会・文化・人間行動等の広い側面からみることで、その要因が明らかになり治療や回復に向けた多様な対応が検討できる。入院中の末期患者には、病理研究による治療が役立つであろうが、疾病予防や病因の究明には、社会や集団の環境、仕事や生活や食物等の要因研究が求められる。

生物学による病気の診断や対応は、ひとつの

見方にすぎないが、長らく現実を理解する全てであるかように扱われてきた。ミシュラー¹²⁾は、生物学的疾患過程と病原体に一面的に焦点をあてることは、健康、病気、医療への包括的アプローチとして不適當であり、生物医学モデルの社会的文脈からの分離を指摘している。

病理や疾病に焦点をあてる医学モデルの限界をふまえ、人間と環境のエコロジカルな視点とその交互作用に焦点をあてたシステム論が生まれた。ゴードン（1969）は、ソーシャルワークの目的が、人間の発達・健康・社会機能を助長し、人間と環境の交互作用のなかでの環境改善をもたらすことと提言し、それがジャーメインのエコロジカル・ソーシャルワークへと繋がっていった。

2 論理実証主義から社会構成主義へ

ストレンクス視点は、医学モデルへのアンチテーゼとして展開するが、もうひとつ論理実証主義から社会構成主義への転換もストレンクス視点の理論的根拠となった¹³⁾。

自然科学では論理実証主義を基本としており、そこでは研究対象を客観化し、観察・分析して一般法則を見いだすことを特徴とし、研究者の主観は極力排除された。

しかし社会構成主義では、物事の理解や把握は各自の主観に基づき把握されるもので、各自の知識の枠組みによりその理解も異なると考えた。また、この知識は固定的でなく、歴史や文化により相対的に変化し、時代や地域差もあるとした。

論理実証主義では、客観的観察により事実が形成されるが、社会構成主義は人々の社会的交互作用により知識が生じるとしている。つまり、知識は常に相対的であり多元的な視点を持つ。

ソーシャルワークでは、ゴールドシュタインらにより社会構成主義が論理実証主義に変わるメタ理論として提起されたことで、「実践の知恵の理論への位置づけ」と「価値に基づいた理論の構築」の必要性があげられた。それは、利用者の視点から社会関係を見ることであり、利用者の信念や価値観から彼らの生活の枠組みを捉えることであり、ソーシャルワークが本来保持してきた価値や実践原理と類似する。そして、ソーシャルワークの科

学観の根底にあるメタ理論を転換することで、価値と知識が一致した専門性の構築を図ることも可能になった。

ソーシャルワークの事例は、利用者の価値観や利用者を取り巻く人と環境の交互作用により流動的に変化し、類似の事例はあっても同じ事例はひとつとしてない。類似事例の分類によりある程度普遍的な対応が可能な場合と、各利用者の価値観や考え方に合わせ援助者が良いと思うことでなく、利用者が望む対応を行わなければならないときがある。それは、実証主義的科学論の観点と社会構成主義的観点の両者による観察と理解が必要であり、意識的に切り替えることで、全人的な人間理解と多面的な支援につながるのではないかと考える。

3 社会構成主義の考え方

カネス・J・ガーデン¹⁴⁾は、社会構成主義を理解する手がかりとして、以下の四点をあげている。

まず1点目は、「言葉は事実によって規定されない」ということで、どんな事実も状態も無限の説明の仕方があり、ひとつの言葉や記述が全てではないということである。それは例えば、「高齢者は社会的弱者」や「ガンは命に関わる病気である」という言葉は、見方を変えればその逆の言い方もできるし、既存の社会常識や知識の枠にとらわれず、社会的弱者やガンが存在しないという世界を構成することもできる。このような見方は、脅威として感じられる面もあるが、既存の常識や世界観にとらわれない自由を得たという考え方もできると述べている。

2点目は、「記述や説明や表現は、人々の関係から意味を与えられる」ということで、意味は人々の関係の中から作り出されることを示す。私たちの理解は、私たちを取りまく「関係」から要請され、「関係」がなければ現実感も希薄になるということである。ここでいう「関係」とは、人々との社会的関係だけでなく、自然との関係、言語との関係、文化や歴史との関係等、人を取りまくあらゆる「関係」を指す。

3点目は、「何かを記述したり説明したり表現したりする時、同時に未来をも創造する」ということで、人と話し、何かを書いたりする瞬間にも、

私たちは未来を作っているということである。伝統や習慣を守り、家族や友人との関係を維持する場合も、その意味を再構成し、それを維持する努力があるし、何かを変える時も既存の理解に立ち向かうとともに、新たな可能性を切り開くことができる。

4点目は、「自分の理解への反省が未来にとって不可欠」ということで、社会構成主義では、自分の前提を疑問視し、既存の知識や常識を疑い、現実を見る別の枠組みを受け入れ、様々な立場を考慮して取り組む姿勢を重視している。つまり、「当たり前」のことを安易に受け入れる姿勢を批判し、それらがひとつの常識や伝統にすぎず、自分の頭と言葉で理解し、認めていこうというという提案をしている。

科学の世界では、客観的に観察し、合理的に推論し結果を出すというプロセスを経るが、そこで認知された科学的真理は一般的な概念となる。しかし、社会構成主義は、その科学的真理が、科学者コミュニティと人々の関係性から生まれた決定にすぎないとしている。

これは、フーコー¹⁵⁾の、「普遍的心理を手にする者は人々を服従させる」という、知識と権力関係への対抗と源流を同じにし、知る者と知らざる者の存在に批判の目を向けている。科学的な解釈が広まることで、何かを得るのは誰か、失うのは誰かを考えると、知らざる者が不利益をこうのは明白である。

それを医師と患者の関係で考えると、その不平等な上下関係の理解が理解できる。また、近代医療は医師が多大な権限を持ち、人々は医師に依存し自立性を奪われるという現象も現れている¹⁶⁾。

ソーシャルワークにおいても、アメリカを中心とした1960年代以降の理論的批判のひとつとして、専門職と利用者間に生じる上下関係や支配的な関係の存在が指摘されている。ソーシャルワーカーと利用者の援助関係は、上下関係ではなく同等の関係である。ストレンクス視点では利用者を中心に、利用者の価値観や意向に合わせて支援を組み立て、利用者が望む自己決定により人と環境の調整を行っていくが、それは、社会構成主義を

メタ理論に転換することで、論理的根拠がみえてくる。

利用者とソーシャルワーカーにとって、その現実と同じであるときもあるが、同じでないことも多い。また、利用者が持つ知識とソーシャルワーカーが持つ知識とは異なっていることも多い。現実と知識は、それぞれの社会的文脈と関係がある¹⁷⁾ので、その差を理解し利用者の側に立った支援を行うためには、実証主義的科学論だけでは限界がある。従来、ソーシャルワーカー主導により、隣接科学の成果を取り入れた客観的なアセスメントやプランニングが行われているのが一般的であるが、利用者本位の生活に根ざした支援を行うソーシャルワークは、それだけでは対応が難しい事例も増えている。メタ理論の転換により、利用者の主観的世界を尊重し、利用者が望む意味づけにあわせる社会構成主義の視点は、ソーシャルワーク実践の可能性を広げると考えられる。

4 スtrenグス視点とナラティブ（語り）の関連

心理学者のブルーナー¹⁸⁾は、物事を知る様式として、科学的様式と物語様式をあげている。科学的様式は、論理的一貫性によって普遍的な真理を探究し、証明・検証することであり、物語様式は、ある事柄を理解するときの意味の連関や解釈をあげている。物語様式は、固定した体系により真理を探究することなく、聞き手と語り手の交互作用により意味を探究するものである。

ストレングス視点による支援は、科学的様式ではなく物語様式であり、自らの語りを外在化する中で、事実の多様性を理解し、新しい意味づけを行う過程ともいえる。サリービーは、個人の語りがストレングスの宝庫であり、人は自分自身の語りを探究することから、新たな理解や意味を見出すとしている。また、ジャーメインとギッターマンは生活モデルの特徴としてライフ・ストーリーを重視し、ソーシャルワーカーの枠組みでなく利用者自身の語りを援助過程の基本としている。

利用者の個人的なストーリーは、別の視点から再構成することで、社会的な世界へとひろがることもある。プラマー¹⁹⁾は、その過程を4つの次元

で説明している。1点目は個人的次元であり、自らの人生を探究するレベルである。2点目は、状況的次元というが、同じ様な境遇の他者と語り合うことで共通点を見出し、状況を客観的に把握できるというレベルで、集団的次元ともいえる。3点目は組織的次元で、誰かに向かい語りかけることである種の形式が生まれ、社会的なルールに沿った語りが生まれるということである。4点目は文化・歴史的次元で、語りは社会的に認知され、公共の場に広がるというレベルである。

個人的な語りや、集団、組織や地域、そして社会全般まで広がるプロセスは、ジェネラリスト・ソーシャルワークの支援構造との共通点が多い。利用者のナラティブ（語り）が、個人レベルでの探求にとどまらず、集団の中で共有され、組織や地域の中で認識されることにより利用者のストレングスが引き出せ、エンパワメントが図られるなら、ソーシャルワーカーはその支援を各レベルで行うことが求められる。その際ジェネラリスト・アプローチの枠組みに基づき、ソーシャルワークの方法論を組み合わせた支援を行うことができる。

ストレングス視点は、利用者の語るストーリーからその強さを引き出し、新しく組み替え、再認識する過程でもあり、それは援助者との共同実践の過程でもある。サレイベイ²⁰⁾は、利用者の新しいストーリーを作り出すために、ストレングスを引き出す質問をいくつか提起しているが、それに応えることで利用者は事実の多様性の理解や、新しいストーリーの意味づけに役立てることができる。

III ICFとストレングス視点の関連

1 ICFにおけるストレングス視点の活用

ICFでは、利用者のプラス面（長所）に注目してそれを引き出し伸ばす視点が求められ、利用者の心身機能の低下が生活を制限するという「基底還元論思考」²¹⁾でなく、その機能低下のなかで潜在的な生活機能を発見し開発する視点を持つ。

利用者の長所は、個人因子としての生活歴・職業歴やこれまでのライフスタイル、そして環境因子としての家族・友人や近隣地域、年金や保険等の経済的な状況、利用可能な制度やサービス等か

ら、幅広く把握することができる。この幅広い視点での長所の発見は、ストレングス視点と重なるところが多い。

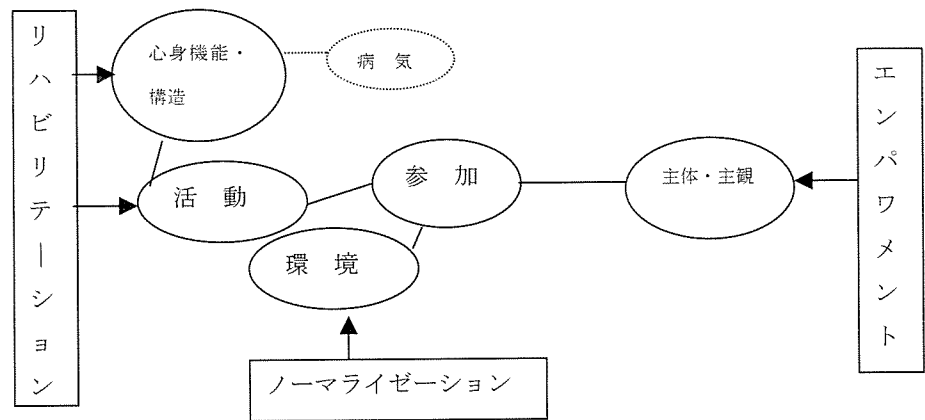
そして、ICFの視点に立った利用者支援では、利用者の最も幸せな状態(あるべき人生)を先に思い描き、それを実現していく目標志向型のアプローチが提起されている²²⁾。その過程の中で、段階を追っ

て実現可能な目標を設定し、到達時期を決めてチーム協議の中で進めていく。その際、「利用者の最も幸せな」「あるべき人生」は、利用者参加による決める部分であり、それをどのように引き出すか、利用者と家族の合意を得るかは、ソーシャルワークの信頼関係に基づく面接技術や家族アプローチによる調整が活用できる部分である。

このように、実際の利用者支援の場でICFの活用をめざすなら、ソーシャルワーク方法論とストレングス視点を適用することができる。

2 ICFを通じた客観性と主観性の結合

上田敏によれば、ICFモデルは客観的世界に存在するものを対象にしている。しかし、「人が生きる全体像」を考えた時、人間の主観的な世界や心の世界をはずすことはできず、ICFにはそれが不足していると述べている。例えば、加齢によるADL機能の低下や、記憶力や認識力の低下は、高齢者に心理的なダメージをあたえるし、生物学的にも若い時と同じような心身状況ですごすことは難しい。しかし、加齢を受け止め、残された能力を伸ばし、長く生きたことによる人生の知恵や経験を生かすことで、高齢期ゆえの人生の豊かさや実りを甘受することもできる。このような気持ちの転換や心の変化は、高齢期のエンパワメントとして重要な項目である。しかし、障害や疾病、そして家族問題や社会的変化等により自己の回復力の低下した場合、その支援のあり方が問われるこ



佐藤久夫「ICFの何を、どう活かすか〜ケアマネジメントへの活用〜」月刊福祉、全国社会福祉協議会、2005、P.89

図1 ICF + 「主体・主観」アプローチ

ととなるが、その一つの方法がストレングス視点であり、ソーシャルワーク方法論ということもできる。

佐藤²³⁾は、ICF + 「主体・主観」アプローチとして、「主体・主観」の次元も含めて考えることを指摘している。ICFは、人間の生活一般が持つ複雑さを反映しており、ひとつの特徴だけで事例を扱うのでは、従来の誤りの繰り返しになると述べている。

(図1)を参考に考えると、ストレングス視点が焦点をあてるのは、「主体・主観」に働きかける支援であるが、結果として参加や活動を維持・拡大し、家族や地域等の環境を変え、心身機能・構造の維持と回復につながることになる。その時に、医療・看護・リハビリテーション・介護等多様な専門職と連携することにより、ICFの多面的な理念を生かした支援が実現できることになる。

従来の医療やリハビリテーションでは、論理実証主義が主流であり、利用者の主観や感情に沿って考える社会構成主義の考え方の導入が難しく、多職種で連携する場合、利用者の希望より専門職の診断や意見が優先される傾向が少なくなかった。ソーシャルワーカーが把握した利用者や家族の意向と、彼らの価値観や生き方は、科学的実証主義の前では軽視されがちであり、利用者本位のふりをして専門職の優位性を保つ支援がないとはいえない。しかし、ICF + 「主体・主観」の考え方は、

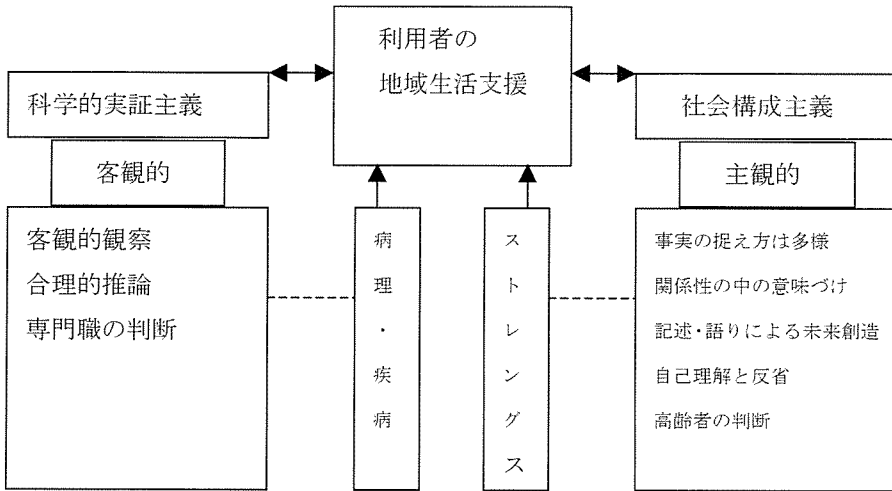


図2 科学的実証主義と社会構成主義の併用

実践現場における論理的科学主義と社会構成主義の両立の可能性を示し、(図2)のように利用者本位に利用者の意向を中心に専門職が連携するという視点が、より明確に提示できるのではないかと考える。

IV ジェネラリスト・ソーシャルワークへのICFとストレングス視点の活用

1 ストレングスと障害の理解

ソーシャルワークは、従来、問題や欠損に焦点を絞り、それを解決する援助プロセスを取ることが多く、ソーシャルワーカー自身が問題解決者となる場合が少なくなかった。しかし、ストレングス視点による援助では、利用者が問題解決の主役であり、ソーシャルワーカーはそれを助ける資源のひとつと位置づけられる。そして、ソーシャルワーカーも家族や組織や地域と同様に、利用者を取り巻く環境のひとつとして考えることもできる。

(図3)は、対象となる課題へのストレングスと障害(課題)について、整理したCowger²⁴⁾が考案した図表である。下記の四分割された図

の中心に課題となる問題があり、それについて、個人や家族、ソーシャルワーカー、組織、地域の各レベルでの「ストレングス」と「障害」についての項目がある。それは、利用者やソーシャルワーカーの主観的な意見もあれば、客観的な観察や判断もある。

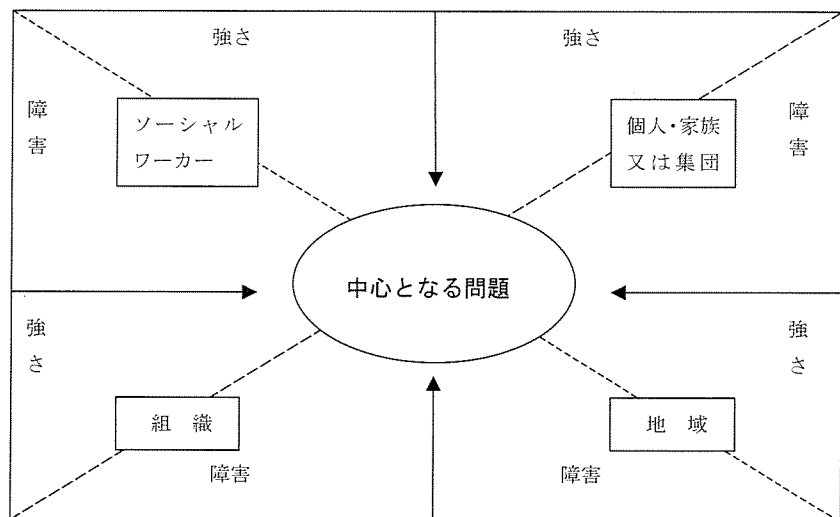
ジェネラリスト・アプローチにおいて、個人・集団・組織・地域への多

角的なアセスメントを行い、障害(問題)とストレングスを把握していくことは重要な視点である。また、エコシステムにおいて、個人から地域までの各システムが重層的に重なり合い、関連しあう交互・相互作用が働いているので、中心となる問題の理解だけでなく、個人を中心に地域へと広がる縦断的な理解も必要になる。

2 個人・家族・組織・地域への支援と介入

ジェネラリスト・ソーシャルワークは、プランニングから介入まで、マイクロレベルからマクロレベルの様々な介入方法が考えられる。

マイクロレベルの実践目的は、クライアントの機



(John Poulin "Collaborative Social Work" F.E.Peacock Publishers.Inc 2000. P.111)

図3 利用者を中心にした障害と強さの理解

表1 利用者システム、目標、システムレベルによる課題への介入

システム レベル	クライアント システム	支援関連の 目的	介入の	課題
			個人への支援	システム変革への活動
ミクロ				
個人	個人	役割を高める	支援の提供	支持的な助言
家族	夫婦・家族	エンパワメント	動機を高める	カウンセリング
集団	小グループ		希望の育成	サービス連関
			強さを見いだす	サービス調整
			力を集める	サービス交渉
			理解力の増加	資源の結集
			コミュニケーションの促進	アドボカシー 教育とトレーニング
マクロ				
組織	機関・施設の 業務実施と 責任	組織改善 サービス改善 サービス開発	↓	教育と訓練
				計画作成 地域開発
地域	専門職の力量 地域連携 近隣グループ	状況改善 住民エンパワメント 資源開発 自覚促進 住民の結集	↓	

(John Poulin “Collaborative Social Work” F.E.Peacock Publishers.Inc 2000. P.185)

能とエンパワメントを高めることで、個人・家族・小集団への支援を行う。内容は、支援的なカウンセリングやサービス紹介や調整、社会資源の活用、そして利用者へのアドボカシーや教育と訓練活動などである。

そして、マクロレベルでは、地域のフォーマル・インフォーマルな多機関と組織を対象に、その変革に焦点をあてた支援を行う。内容は、組織運営、教育・訓練のシステム構築、プログラムの策定と評価、住民のエンパワメントと主体性の形成、資源開発、地域開発等多岐に渡る。

特にマクロレベル実践の中で組織運営は重要であり、その変化はサービスの質や提供体制を変え、新しいサービスを作り出すこともある。この場合の組織は、営利・非営利の組織であることもある

し、近隣の小地域であることもあるし、市町村等の自治体に広げて考えることもできる。

ソーシャルワーカーは組織や機関に属し、その枠組みの中で働く傾向がある。そのため、利用者サービスの質や内容を変えるため、自らが所属する組織、関連する多機関との連携、仕事をする市町村について、働きかけていく視点も重要となる。

ジェネラリスト・ソーシャルワークは、ミクロレベルで相談を受けサービスを提供する中で、利用者の意欲や希望を高め、強さを伸ばし、資源を動員し、利用者や家族や近隣者との理解を深め、コミュニケーションの促進をめざす。しかしそれは、個人・家族・近隣等を特定し働きかける場合もあるが、相互関連の中で調整をする場合もあり、ケースワーク・グループワーク等の各方法論を総

合的に活用する。その実践の蓄積から、マクロレベルへの改善点や実施項目を見出し、将来の開発や計画的実施に向けた項目を抽出し、組織や地域レベルへとつなげていくことになる。

このように、(表1)のような枠組みをふまえて個人から地域まで、ストレンクスと障害へのアセスメントを行う。そして人との環境の交互関係をふまえて、介入部分の意識化や計画的な介入ができるのなら、地域生活支援におけるジェネラリスト・ソーシャルワークの役割は高まるのではないかと考える。

引用・参考文献

- 1) バートレット, H. M 著 小松源助訳: 「社会福祉実践の共通基盤」 ミネルヴァ書房 1989
- 2) カレル・ジャーメイン他著 小島蓉子編訳・著: 「エコロジカル・ソーシャルワーク」 学苑社 1992
- 3) ハリー・スペクト, ヴィッケーリー・アン著 小松源助訳: 「社会福祉実践方法の統合化」 ミネルヴァ書房 1980
- 4) シーボム委員会著 小田兼三訳: 「地方自治体と対人福祉サービス 英国シーボム委員会報告」 相川書房 1989
- 5) 佐藤豊道: 「ジェネラリスト・ソーシャルワーク研究 人間: 環境: 時間: 空間の交互作用」 川島書店 2001
太田義弘・秋山薊二編著: 「ジェネラル・ソーシャルワーク」 光生館 1999
Louise. C. Johnson, Stephen. J. Yanca "Social Work Practice: A Generalist Approach 8th ed" 2003
ルイズC. ジョンソン ステファンJ. ヤンカ著 山辺朗子・岩間伸之訳: 「ジェネラリスト・ソーシャルワーク 7th ed」 ミネルヴァ書房 2004
- 6) 小松源助: 「ソーシャルワーク実践におけるストレンクス視点の特質とその展開」 ソーシャルワーク研究 vol.22 No.1 1996
- 7) Dennis Saleebey "Strengths Perspective in Social Work Practice" Allyn and Bacon. 2002.
- 8) John Poulin "Collaborativ Social Work Strengths-based Generalist Practice" F.E.Peacock. 2000
- 9) 同上
- 10) 神山裕美: 「ストレンクス視点を活用した高齢者への対応困難事例への支援」 『日本社会事業大学大学院 博士後期課程社会福祉論叢』 2002
- 11) 近代科学は、17世紀のヨーロッパで生れたが、医学は科学分野では比較的遅く発展した分野で、ルイス・トマスというアメリカの医学研究者は「最年少の科学」と表現している。これは、医学が科学発展史の中で遅れているという意味でなく、「生命」という複雑な現象を扱う分野では、当然のことといえる。(広井良典: 「生命の政治学」 岩波書店 2003 P.130)
- 12) エリオット・J・ミシュウラー著 尾崎新・三宅由子・丸井英二訳: 「医学モデルを越えて〜医療へのメッセージ〜」 星和書店 1988
- 13) 狭間香代子: 「社会福祉の援助観」 筒井書房 2001.
- 14) ケネス・J・ガーデン 東村知子訳: 「あなたへの社会構成主義」 ナカナシャ出版 2004
- 15) 桜井哲夫: 「フーコー 知と権力」 講談社 2003
- 16) 島蘭進: 「癒す知の系譜」 吉川弘文館 2003 P.23
イヴァン・イリッチは、人々が医療衛生関係の専門家に囲い込まれる現象を「医療化」とよんでくる。
- 17) ピーター・バーガー+トーマス・ルックマン 山口節朗訳: 「現実の社会的構成〜知識社会学論〜」 新曜社 1977 P.4
著者は、現実と知識の集合体と社会的文脈の関係性が、社会学的分析の対象に含まれるとして、「知識社会学」の必要性を提起している。
- 18) ブルーナー, J.S 田中一彦訳: 「可能世界の心理」 みすず書房 1998
- 19) プラマー, K. 桜井厚・好井裕明・小林多寿子訳: 「セクシャル・ストーリーの時代 語りのポリティクス」 新曜社 1998
- 20) Dennis Saleebey 前掲書.
- 21) 「基底還元論」とは、多数の階層からなる複雑な構造を持つものの階層間の相対的独立性を否定し、ある階層のみを「基底(基礎・基盤)」とみて、他階層はそれによって規定されるという考え方である。(大川弥生: 「介護保険サービスとリハビリテーション〜ICFに立った自立支援の理念と技法」 中法法規 2004 P.73)
- 22) 大川弥生: 「介護保険サービスとリハビリテーション〜ICFに立った自立支援の理念と技法」 中法法規 2004
- 23) 佐藤久夫: 「ICFの何を、どう活かすか〜ケアマネジメントへの活用〜」 月刊福祉 全国社会福祉協議会 2005 P.86~89
- 24) Cowger, C. "Assesing client strengths: Clinical assessment for client empowerment" Social Work, 39, 1994. P.262-267.

A Strengths Perspective Based on Generalist Approach to Social Work

— A View of Community Care Support —

KAMIYAMA Hiromi

Abstract

Strength model was made by the antithesis of medical model under the background of the change of meta-theoretical framework from logical positivism to social constructivism. Strength perspective is essential framework for generalist social work, and its feature is that social workers find out clients' strength and they intervene clients based on the transaction between clients and environment.

ICF (International Classification of Functioning, Disability and Health) and strength perspective have common viewpoints in finding out clients' good points and build them through individuals' environmental factors.

Practice based on the framework of generalist social work is one of the ways to realize the concept of ICF.

Strengths perspective in generalist social work provides viewpoints for assessment of obstacles and strength. Social workers, based on this perspective, make intervention in transaction among individuals, group, organization and community. Strengths perspective provides essential concept to promote community care support.

Key words : Strengths Perspective, Generalist Approach in Social Work, ICF (International Classification of Functioning, Disability and Health), Social Construction, Community Care Support